メニエール病の経過観察

佐野 光仁*・松永 喬**・水津百合子***・荻野 仁*
松永 亨*・内藤 儁*

The Longitudinal Observation of Meniere's Disease.

Mitsuhito Sano, Hitoshi Ogino, Toru Matsunaga, Toshi Naito*

(Osaka Univ.)

Takashi Matsunaga**

(Nara Pref. Med. College)

Yuriko Suizu***

(Kansai Rosai Hosp.)

1. We sent out a questionnaire to Meniere's disease patients treated at Osaka University Hospital and Kansai Rosai Hospital to determine the course of the disease in these patients. The subjects included 170 patients treated at Osaka University Hospital and 15 treated at Kansai Rosai Hospital. We investigated the course of vertigo attacks, tinnitus, hearing impairment, a full feeling in the ear, hyperacusis, nausea, vomiting, headache and general fatigue.

2. Results

- a. The percentage of recovery was about 40.
- b. In 60 percent of the cases, the symptoms of vertigo disappeared within 3 years but 3 years medical care was necessary.
- c. In a few, hearing impairment increased day by day due to aging or repetition of attacks.
- d. In half the number of patients, there was no change in tinnitus and hearing impairment.
- e. Symptoms of hyperacusis, headache, general fatigue continued while nausea and vomiting disappeared after a short time.

は じ め に

めまいを訴え受診する患者は年々増加する傾向にある。図1は大阪大学耳鼻咽喉科（以下阪大と略す）外来を受診した昭和31年より昭和53年までの総外来患者に対するめまい患者の受診割合の推移を示したものである。昭和30年代に比較して昭和40年代、50年代では3倍、4倍と増加している。このうち耳鼻科医にとって代表的な疾患であるメニエール病（以下メ病と略す）の受診割合を調べると図2の如く、昭和30年代、40年代、50年代と次第に減少してきた。しかし著者らのめまい

*大阪大学医学部耳鼻咽喉科学教室

**奈良県立医科大学耳鼻咽喉科学教室

***関西労災病院耳鼻咽喉科

外来（昭和43年より開設）でメ病患者の予後、経過についてまとめた調査資料がなかったので、阪大および関西労災病院耳鼻咽喉科（以下関労と略す）のメ病患者のアンケート調査を行った結果を報告する。

図1 大阪大学における総外来患者数に対するめまい患者の年代別推移

図2 昭和34年、44年、52年におけるメニエール病、眩暈症の推移
数字は総外来患者に対する%（ ）内は患者数

調 査 方 法

調査対象は阪大、関労を1973年以降1978年までの6年間におとずれたメ病患者各々170名、15名の計185名（男107名、女78名、14才～71才平均年齢42才）である。アンケートの内容は表1に示した。主症状たるめまい発作の経過、それに伴う耳鳴、難聴、耳閉感、音過敏性、嘔気、嘔吐、頭重感、頭痛、倦怠感に対してその症状の程度により、消失（なくなった）、軽快（非常に軽くなった、少し軽くなった）不変（変わらない）、悪化（悪くなった）の4段階で回答を

求めた。集計は便宜上、A群（1、2年の経過群、1977、1978年の初診群）B群（3年間の経過群、1976年の初診群）C群（4年間の経過群、1975年の初診群）D群（5年間以上の経過群、1974、1973年の初診群）の4群に分け、これにより初診時の症状と調査時点（1978年11月）の症状を比較し、メ病患者の経過を把握しようと試みた。

結

果

1. めまい

2. 耳鳴

3. 難聴

4. 耳閉感

図3 めまい，耳鳴，難聴，耳閉感の推移
(数字は%)

アンケートの回答者数はA群26名，B群21名，C群20名，D群16名。計83名で回答率は44%であった。結果を図3，図4に示した。

めまい症状については消失したと回答した割合はA群38%，B群33%，C群60%，D群63%と経過とともに明らかに増加している。軽快したと回答した割合はA群43%，B群48%，C群20%，D群18%と経過とともに逆に減少する傾向にあり，不変，悪化と回答した割合はA群19%，B群19%，C群20%，D群19%とほとんど一定の割合であった。

耳鳴については各群とも変化なしと回答した割合が多く。A群69%，B群58%，C群47%，

D群69%を占めていた。また軽快したと回答した割合はA群15%，B群27%，C群36%，D群13%であった。消失したと回答した割合はA群12%，B群11%，C群5%，D群13%と各群10%前後に認められた。

難聴については耳鳴と同様に変化なしと回答した割合がA群72%，B群69%，C群53%，D群50%と各群とも大半を占めていた。その割合は経過とともに減少していた。悪化したと回答した割合はA群8%，B群6%，C群24%，D群20%と経過とともに増加していた。また難聴が消失したと回答したものを含め聴力に自覚的改善がみられたと回答した割合はA群20%，B群25%，C群22%，D群30%と各群に差がなく20～30%認められた。

5. 大きな音がひびく

6. 嘔気、嘔吐

7. 頭痛、頭重

8. 倦怠感

図4 音過敏，嘔気，嘔吐，頭重，頭痛，倦怠感の推移（数字は%）

表1 アンケート内容

次の症状は前回治療時（ 年 月 日）に比べてどう変わりましたか、該当する項目に○印をして下さい。

御氏名（ ）

1. めまい なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった
 めまいが現在もある場合は以下の項目についても御記入下さい。

① めまいの種類は
 ① ぐるぐるまわる ② からだが舟にのったようにふわふわする
 ③ たくらみ 目の前が暗くなる ④ その他（ ）

② めまいの頻度は
 ① 月に 回くらい起る ② 週に 回くらい起る ③ 毎日 回くらい起る
 ④ いつも起る

③ めまいの程度は
 ① めまいはするがあまり気にならない ② 気になるが仕事は普通にできる
 ③ 非常に気になるがなんとか仕事ができる ④ 非常に強く何もできない

④ めまいの持続は
 ① 瞬間的（5～6秒以内） ② しばらく続く（1～5分くらい）
 ③ 1～2時間くらい ④ 半日以内 ⑤ 半日以上

2. 耳なり なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

3. 難聴（きこえにくい） なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

4. 耳がつまった感じ なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

5. 大きな音をきいたとき なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった
 耳にひびくこと

6. 嘔き気、吐いたりすること なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

7. 頭痛・頭重感 なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

8. だるいこと なくなった, ^{非常に}軽くなった, 変らない, 悪くなった

耳閉感については各群ともほとんど同様の傾向を示した。症状が消失したと回答したものを含め症状の改善が認められた割合と症状が不変と回答した割合はそれぞれA群では50%, 50% B群では35%, 58%, C群では57%, 43%, D群では58%, 42%と半々であった。

音の過敏性に対しては症状が消失したと回答した割合がA群9%, B群13%, C群17%, D群43%と経過とともに増加し, A群では10%前後であるのに対し, D群では半数近くが症状が消失したと回答した。悪化したと回答したものを含め変化なしと回答した割合はA群64%, B群53%, C群42%, D群43%と時間の経過とともに減少していた。

嘔気、嘔吐については消失したと回答した割合はA群57%, B群54%, C群76%, D群82%

と短期間で大半が消失したと回答し, その割合は経過とともに増加しD群では80%にも達している。また変化なしと回答した割合はA群19% B群15%, C群18%, D群13%と10%台に認められた。

頭重感、頭痛に対しては消失, 軽快をあわせ自覚的に症状が改善したと回答した割合は, A群65%, B群75%, C群86%, D群64%であった。不変の割合はA群25%, B群25%, C群14%, D群31%に認められた。

倦怠感については消失したと回答した割合はA群28%, B群9%, C群60%, D群50%と経過とともに増加する傾向を認めた。また変化なしと回答した割合はA群33%, B群53%, C群40%, D群29%と各群に大差を認めなかった。

総括と考察

本邦ではメ病の経過、予後に関して岸¹⁾、上村²⁾らの報告はあるが、我々の外来ではメ病の病態、めまい患者の動態について報告^{3,4,5)}しているもののメ病の経過、予後に関する報告はなかったので今回の調査を行った。ただ回収率が44%で未回収部分を考慮する必要があるが、ある程度のメ病患者の経過を把握できるものと考えられる。3年の経過までは色々めまいを訴えているが、3年以上ではかなりの割合(60%位)でめまいが消失した症例が増加している。この点から少なくとも3年間は患者を治療し経過観察の必要があると考える。耳鳴、難聴症状は各群で変化なしと回答した割合が大半占めるが自覚的ではあるが10%前後耳鳴が消失するもの

もある事は注目に値する。さらに難聴は時間の経過とともに悪化する割合が増加しているが、これは患者の加齢による aging deafness か、発作反復による聴力の悪化のいずれかが考えられる。しかし耳鳴の悪化の割合は増加せず耳鳴と難聴は必ずしも平行しない点は注目される。嘔気、嘔吐の自律神経症状はかなり早期に落ちつくが、音過敏性、頭痛、頭重、倦怠感はかなり長期的に持続する事が明らかとなった。これはメ病が末梢迷路機能の障害だけではなく、背景に自律神経系の何らかの異常が存在していることが推察される。したがってメ病に対しては難聴、耳鳴の内耳障害と共に、今後自律神経の問題に関する研究が課題になると思う。

まとめ

1. 阪大、関労におけるメ病の6年間の調査結果を報告した。
2. 3年以上の群では約60%にめまいが消失したのでメ病のめまい経過は3年間の経過観察が必要と考えた。
3. 耳鳴、難聴は変化なしと回答した割合が各群で大半を占めた。難聴は経過とともに増悪する割合が増加した。
4. 嘔気、嘔吐は早期に落ちつくが、音過敏性頭痛、頭重、倦怠感は一時的に持続した。

本研究は厚生省特定疾患メニエール病調査研究班の国庫補助金の援助による。

参考文献

- 1) 岸 澄子：メニエール病の経過と予後に関する研究。日耳鼻 76：386-400, 1973.
- 2) 上村卓也，他：初診後平均8年のメニエール病患者の予後。耳鼻臨床 70増5：1691-1696, 1977.
- 3) 松永 喬，他：阪大におけるめまい患者の受診動態。耳鼻臨床 68：1205-1213, 1975.
- 4) 松永 喬，他：メニエール病の受診動態。耳喉 48：65-71, 1976.
- 5) 内藤 僑：メニエール病—教室における最近の業績を中心に—。耳鼻臨床 66増1：1-48, 1973.